

Pensoj flugas trans la laud - limon

The Senryu Zasshi

昭和十三年七月
創刊廿五年九月
日發行
每卷五卷
每卷九錢
每月一元一日發行
創刊大正十三年・通卷二百八十號

麻生路郎☆主宰



九月號

No.280

川柳の雄証

氣持を代表して頂いてゐるやうに思います。私は以前路郎先生が指導して居られた松坂俱樂部の川柳講座で初めて川柳を習ひ初めた頃から憧憬してゐた作家の一人です。

論 幽王さんの巧まざるユーモアと暖かい人間味を嫌はず作品に造詣してゐるものですが、最近此処二、三ヶ月の作風を拜見してみますと何か大きな変化があるやうに思ひますので幽王さんにお聴きしたいと思ひます。

幽王 穴があれば入りたいやうなお言葉ですが、私達若いものには、もつと感激があつてよいのではないかと思ひ

柳祖福井川柳は八代將軍吉宗公の治世、享保三年戊戌(へつちのえいぬ)に江戸淺草の竜宝寺門前町に生れた。幼名を勇之助と称し後に父の八右衛門を襲名した。川柳は俳諧に於ける雅号である。この年、人見録々、谷口、鴉口等の俳人が生れ芭蕉門の金沢の北枝が死に、千代女が福田某に嫁し、園女が智藏尼となつてゐる。そして柳祖は十一代家齊將軍の治世、寛政二年九月二十三日に七



川柳忌に際して

柳祖逝いて百六十年

麻生路郎

十三才江戸で歿した。柳界では明治、大正以來九月廿三日に川柳忌を修するやうになつたが、旧曆の九月廿三日を新曆九月廿三日に修してゐるので眞の忌日は云えな

ます。私自身、最近子供を亡くして、その感激があまりに大き過ぎるために、句を作つてみても結局まごまらず、作句を断念して居りますが、川柳塔の句の中でも、ことに安易に作られたと思へるやうな句を拜見しまして、もつと作家は個性を持たなければいけないのではないかと思ひます。その点、鮎美さん、豆秋さんのやうに自然に個性が滲み出るやうな作家がもつと出て欲しいと思ひます。

野 介 今鮎美さんの話が出ましたが鬮骨さん何か…… 鬮 骨 我はまだ柳歴も若く、何等研究心もなく、のほ、んと作句しておりますので、今日

日のこの座談会へのうつつはとての人間ではありませんが、今野介さんから水を向けられましたので一言述べさせていただきます。私としましては日頃親しく接してゐる鮎美先生以外の作家のことは深く知らないのですが……私が川柳を始めましたのは、

サイレンに大きくゆれる影 ぼうし と言う鮎美先生の句に大きく心を引かれたからです。何故この句がそれ程私の心を動かしたか、未だに私自身解らないのです。然し、 われに強く燭のうまれくる いのち

あるのですが、この句によつて私はハツキリと——以前問題になつた柳魂が出て來ますが——その柳魂に生きていられる鮎美先生によつて、私はアブレゲールのまだ若輩の青年ではあります、ハツキリとした自分の信念を持つて柳道に精進してゆきたいと思ふのです。

野 介 只今鬮骨さんから鮎美さんの句に如何にして傾倒してよいか、また鮎美さんの句によつて川柳に対する目を開かされたと言ふ御感想を承りました。川柳塔に於ける鮎美氏の存在は確かに大きな存在でありますし、同時に異色ある存在であることに異論

はありませぬ。たゞ氏の川柳に對する方向に、私として容易に同意出來難い一線があるやうに感じさへれます。それは氏の持つロマンチズムが鮎美氏の川柳を支へてゐるかのやうな印象を與へるのであります。このロマンチズムは今や我々川柳アブレゲールによつて批判されるべき位置にあるのではないかと思ひます。例へば

君雲を話す心になりたまへ この幻想は美しい。日常生活に追ひ詰められてゐる私達にとつて、確かにこの句境に心引かれるあるものを持つてゐることは間違ひはありません。然しより鋭く現実の根柢を掘り出さずいられない私達にとつてこの甘さは遂に昨日の感傷に過ぎない。我々はもつと理智的に現実を批判する処から我々の川柳を出発せしめなければならぬ。こ

一せいにと云う訳にいかぬのである。我が社でも本年の川柳忌は九月の第一土曜にこれを修することになつてゐる。柳祖の幼年時代のことは未だにこれと云う文献が発見されないので不詳である。これは川柳に携はるものにとつては寔に遺憾である。

東都在住川柳人の協力によつて、この方面の研究がもつとすゝめられてゐるのではないかと思ふ。川柳忌がめぐつて來る度にこのことが私のあたまを去らない。

川柳忌は事柳界に関する限り、嚴密な反省を要するは言を俟たないが、一步ずつ世のため、人のために深思すべき日としたいものである。斯くてこそ川柳の存在が意義あるものとなるであらう。

いのであるが、こんな問題は一柳社で改めたところで意義がないので、矛盾を感じながらも九月廿三日を襲跡してゐるのである。その九月廿三日すらも、各社の都合で

家治、家齊と四代も變つていて、皇室の威力の甚しく衰微した時代で、世相は軍閥の横暴を極めた昭和十七年頃と多くの類似点を持つてゐた。

私は昭和十七年の川柳忌に際し、これ等の類似点を述べて世の反省を促したが、一顧も與えられなかつたことを想起するものである。

野 介 今、野介さんが還廻しに鮎美さんを批評してゐま

したが、僕としては柳魂と言
うやうな曖昧なもので納得す
るものではないとせん。飛躍
して岡山の山分淑郎さんの八
月号川柳塔の句の中で、
言ひそびれ二人何處まで月
を踏む

大阪の富岡淡舟さんの句
人間の脆さよ心臓麻痺で死
に
一攫千金の誰か夢なき寶く
じ

こう言つた一連のリアルな句
に根本的な敬意を拂うことが
出来ません。それから七月号川
柳塔で古い作家ではあります
が、大阪の北川春巢さんの句
父と子と車窓へ向いてガム
を噛み

同じく大阪の麻生梨里さんの
句
娘同志で嫁に行かない指を
切り
タヤけへ別々なこと思つて
た

こう言つた我々男性では思い
も及ばないやうなアイデア
が生まれることに大きな喜び
と驚異を感じます。

翻 骨 晴峯氏が鮎美先生の
柳魂論を曖昧なものとしか受
けとられないことは遺憾であ
ります。私も柳魂をハッキリ
と知つてゐる訳ではありません
が、柳魂とは一つの信仰心
であつてそれによつて川柳に

生きてゆくと言うのではない
かと私は思います。私は柳魂
とはそんなにむつかしいもの
ではなしに、乗物の中で年寄
りや子供に席を譲つて上げ
る、これも柳魂と言へるので
はないかと思ひます。

晴 峯 柳魂の話がまたして
も繰返へされましたが、およ
そ戦時中の大和魂にも似たや
うな割切ることの出来ない柳
魂と言ふ言葉でもつては到底
今後の作家の満足し得ないも
のではないかと思ひます。

史 葉 大分鮎美先生の柳魂
論が問題になつて來ましたが
これはまた次の機会に譲つて
置いて、今日は愛論さんと、
川維の純支部的な性格を持つ
烏ヶ辻川柳会の代表として出
席させて頂いておられますの
で、此の辺で一寸同川柳会の
作家に就いて述べさせて頂き
たいと思ひます。私に川柳に
入れど勤めてくれたのも、そ
れから路郎先生は別として指
導をして頂いたのも没食子先
生ですが、先生の作品に就い
ては私が説明するまでもな
く、川柳塔の句を見て頂いて
も大體解ると思ひます。

四十の詩寂しきものにばか
りふれ
と言う先生が最近作られた句
を讀んで所謂戦後派的な処も
なく、本當の川柳と言ふもの
がこの句を通じて窺はれ、以
後の羅針盤としております。

愛 論 没食子先生は何時も
想が古い々々口癖のやうに
言つて居られますが、人情諷
詠は確固不変的なものがあつ
て、没食子先生の作句態度を
リビートすればいゝと思つて
精進しているものです。

野 介 没食子さんは、あく
まで川柳の正系を踏んだリア
リズムの作家であり、一抹の
メカニズム的な新しさを感じ
させる処に氏の作家としての
ユニツク味を覺えます。

道頓堀にて
無名屏を訪れたらストリップ
ヨウを覗に行きませんかと誘は
れる。金まで出して覗たくないと云
つたら案内をしてあげますとのこ
と。では参考のために覗せてもら
つておこうと出かけた。すいぶん
這入つていざ。八分通りの後方よ
り席がない。紅をつけたハンケチ
を貰つたりビールを呑ませて貰う
ために前の方の席へつめかけるの
だぞうだ。口づけしたハンカチや
呑みさしのビールを呑みたいとは
幾問しいがきりだ。

日本婦人はストリップアショウに
は適しない肉体の持主であるこ
と、私たちには少しもエロチック
でないことを知つた。「あのお乳
が魅力なんですつよ」と聞かされた
が私は銀紙を貼つたような乳にチ
ツとも魅力を感じなかつた不感症
なんでせうか。(不死鳥)

晴 峰 次々に好意の持てる作
家として岡山の黒田笑泉さん
谷川の水一尺の香をたて
奈良の飯降白香さん

朝から晩まで
ごみの中で十
九の青春
古風ではあるが
ハワイの内藤草
一郎さんの句
三味持てば男
て苦勞した音
色
滋賀の黄瀬美秋
さん

惜しい氣はケーキ残して出
る二人
兵庫の石岡正司さん
南無阿彌陀佛と喉佛つまみ
あげ
等々です。重鎮級では横浜の
福田山雨楼さん
東京のホームで老けてゆく
驛夫

大阪の中島生々庵さん
醫者嫌ひとせぬ父の氣の
弱り
こう言う一連の現実にとつか
と足場を持つた句は我々の進
むべき道を指し示して頂いて
ゐると思ひます。

博 也 前に野介氏も言はれ、
今また晴峯氏も言はれるやう
に若い作家の行くべき方向
に現実立脚した智的な句一
一と言ふことには私もさうあ
るべきだと思ひますが、潮花
さんの

ひまわりも僕もどうやら秋
になり
泣けるだけ君を泣かせる部
屋もなし

豆 秋 作家に就いて語れ
ば、まだ一語りたい作家は
沢山ありますが、今日はもう
遅いので又の機会に譲るこ
とにしませう。

それでは電車の都合もある
でせうから、これで会を閉ち
ることに致しませう。

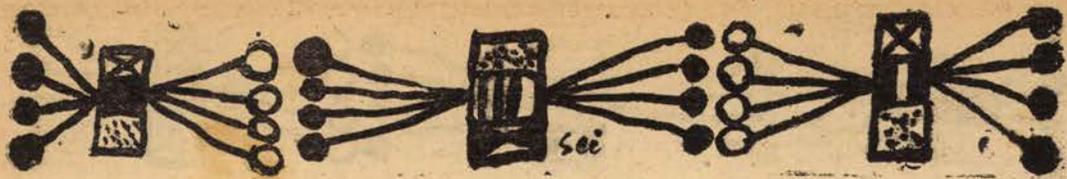
皆さんどうもお疲れの処を
有難たうございました。
(梨里筆記)

殘暑御見舞

藤村雅光

大阪市阿倍野区晴
明通二ノ一九

黒硝子
萬能化粧料容器には勝然！
ヤマギンの……
大阪府大田区長野
西通一丁目四番
山銀株式会社
電話 四四七番



川柳塔

布哇 内藤草一郎

子を生んで酒のさかなの数が減り
いつまでも愛して呉れど笑わせる
見込まれた腕も養家を支へ兼ね
医学卒業近かく髭を立て
就職も定まり明日へ爪を切る

しやつくりが出るのにキツスすると云ふ
尼崎市 水谷 鮎 美

海老天に子らは素直な夕の膳
子の願ひ父母べちやんこになりはなり

兵庫縣 大坂 形 水

にきび青年が増へてきた食事情
悪い例ばかりが浮ぶ枕元
注射する子の素直さがいらしい

大牟田市 高田 抱 逸

貸ポート店の主人は泳げない
二回目の養子もどこか抜けてゐる
未亡人信者になつて若くなり

酌婦にも蟬曳があり涙あり
鍼医者捨てて、政治に切替へる

布哇 市 岡 曉 舟

おはなれへ「イザマツマツ」とふざけて居
夜も更けて後はセンチな話だけ
カフェー通い不思議に軽い老の脚

大阪市 市場 没 食 子

主催者へ花を持たせる間も出し
給與ベース上げる準備か椅子がへり
金儲がてんと下手なる博士なり

神戸市 竹 内 潮 花

歌もいや詩もいや君を想ふ身に
夕焼へ自由になつた汗を拭く
惚れ切つてしまへば嘘も美しく

奈良縣 尾崎 方正

水道の漏りへ午睡が痢をたて
毒舌が刺身のつまとなる生活
棺桶へ好きな絵本も母は入れ
百日の看護短し親として

岡山縣 鈴木 九 坡

先客も集金らしい顔で待ち
デパートの重役という如才なさ
海へ来て大きなお尻見て帰る

岡山縣 大森 風 來 子

海水着去年のままの二人来る
海岸に住んで交通費がかさみ
死へ一歩一歩近づくと下熱なり

次女逝く

大阪市 木下 幽 王

あどけなき兒の死顔に童謡聞ゆ
兒が死ねば街に玩具屋多すぎて
初七日にあの兒の好きな電車が通る

大阪市 水谷 竹 莊

呼捨てが出来ぬ新婚ひやかされ
噂など気にせず氣強く添ひ逢げる
白足袋と袴が好きなき取りの子

五十とは見えませんなとおだてられ

大阪市 吉田 斜 水

夫婦喧嘩したのか早い出勤簿
腰の線風がハッキリ見せてくれ
娘が掛けた受話機の温みまだ消えず

兵庫縣 小西 無 鬼

自轉車のスピード此店に借があり
これしきの借を銀行に見くびられ
女なら身を賣る術もあるとやら

信仰へみだら心を隠しとき
紳さんのこつちやと寄附を押しつける

堺市 中島 生々 庵

誘惑を勝氣の妻に見破られ
母の氣に入つて嬉しいひとえ帯
うらやましくないか俺には母があり
曾我酒家の大阪言葉母に馴れ

兵庫縣 戸倉 普 天

三越で遇えばあれから中風症
馬鈴薯なども贈つても氣に入らず
鳥取市 大西 八 步

金策が命日でも忘れさせ
貸付けた方が病氣になる世相
処置すると銀行にまでおどかされ
仁徳以後民のかまどにある世相

横濱市 福田 山 雨 楼

肩書を驚くなかれ二十七
戸が古りてがたびしするも面白し
名人は次男亡くした駒を投げ

ゴマ塩の髭ものびたり雨説の日

東京都 前山 北 海

私小説ごんだチャタレー夫人書き
会長に戦后派立てるPTA
大吉の日に借金を断られ

嘘までは書けぬで日記つけません
子のために陰の暮しをちつと堪え



吹田市 野本吞水

間借又ビールの栓を抜いた音
乳が張るのも痛ましく一七日
次男死亡

母死亡
二七日三七日小姑弱うなり

布施市 糸本醉月
参議院議員選挙

三六も酒を禁めたか当選し
投票へ女のやはり盛装し
避妊薬薬石効なく又妊娠み

奈良縣 白牛奇朗
エロ本え老眼鏡の曇り拭く
勧誘員に負けて女房に怒られる

岡山縣 山分淑郎
春が来た母も一枚脱ぎました
いつからか嫁に負けてるお母さん

大阪府 富岡淡舟
ライバルえ勝てそうもない僕
の口

篤農家と言はれ税金断はれず
公金で行ける議員の渡米熱
愛情の果てはちよいと遅刻する

奈良縣 飯降白香
官能の味もしらずに愛を説き
蜜豆へ答案みることやめにする

やさしさへまだこれ以上すねるのか
奈良縣 西辻竹青
御家風を継いで矢張り蛙切り

古新聞は疲れた時のシートにし
呉市 林野甦光
子に飽いて夫に飽いて塗つてゐる

レットルが昔のまゝでもう買ふ氣
大阪府 竹田芦穂
お土産と云ふトリツクに官吏馴れ

酒のこと訊く診察は軽くすみ
復興の尺度のやうにパスが延び
税務署に勝つてぬと父が簿記をつけ

京都府 間島青丹子
手を洗ふことも嬉しい幼稚園
甲斐性とは平氣で借金することか

大阪府 上田春柳
丸裸ちやんとちんちんつゐてます
健康を害して

梅雨の入り二合七勺たべかねて
動物園月曜と言ふ森閑さ

大阪府 麻生梨里
奥様の趣味のナスビに水を遣り
おのろけを聴くには馴れぬ瞳の遣り場

バルコニーが欲しく長屋に住み馴れし
余処の軒涼むにはよい桐があり
洋裁も教へおしやべりも教へ

美しき死と書き残す少女の死
小説のそんな言葉は言へぬ恋

布施市 森下愛論
死にたいわなどと女は嘘をつき
愛してる証拠二号はないと言ひ

巻紙もほんのり匂ひ京言葉
親子して金魚すくい夜の店の灯

尼崎市 静岡忠八
移り香にくらしを思ふ終電車
折詰を膝に置いてる終電車

終電車家まで送る友が居る
大阪府 松江梅里
唇を許しただけのほたる狩

独身で泳ぐ浮世に流される
ピヤホールいゝ氣で帰へる炭坑節

岡山縣 直原七面山
父さんのやうな男に囁かれ

その女遂々煙草出して吸ひ
座談会貞操の價值重くみず
溝飛んだ後はやつぱり手を継ぎ

氣があるか今日も近くへ来て座り
アブレゲールの娘氣軽う別れる氣
仰山に脚をひろげてダンスです

女なりけり子孕み
片手あげて甘き囁き

日曜も月曜もない竿を垂れ
人は死すもの何故か此の身の淋しかる

宇部市 上林粗影
ポストンバツクの底にコンドームが凹んでる

雑役と云ふ職名に疑義をもち
梅雨シトシト泌尿科へ通ふ人と逢ひ

愛慾の日々蒲團の絆も褪せず
兵庫縣 石岡正司

競輪で当てたどマダム誘ひに来
ダンサーは垢で光つた子を抱え

差押えさす氣へ妻は酌いでくれ
大阪府 西森花村

お家はなんも間借りの儘で死んでゆき
無責任な御世辞に娘故郷捨て

倒れたら踏んで行くのを友と言ひ
鳥取市 河村日満子

門前に傘の雫をうちほらひ
反対の手を差げかけて辞めにする

お父さんが飲んどいて何呆けてんの
あんさんの皆んなお子さんですかいな

痼癩をたてゝ服まで破りなや
その上によその子までが来て遊び

子を置いて妻も散歩がしてみたく
割勘で善は急げの繩のれん



兵庫縣 田代 尋四
好きですよと言へず花だけ活けておき
宿題をためて母親手古摺らし
くだまいたばかりに恋がかなうたり
八十翁の賀宴

兵庫縣 家沢 薺花
先代の金百円の寄附の石
サンマータム退ける頃からしやんとする
鳥居前たまの徒歩なり頭下げ
サービスのマッチ大きな手を受ける
座談会ボンボンと終りけり

滋賀縣 黄瀬 美秋
極道を直すお嫁にもらはれて
子供心にも先生美くしい
嫁の荷を狙つてたやうに差押
分譲地子等グラランドの夢を持ち
結納がまづけづられた金詰り
受附の化粧する間を待たされる

岡山縣 藤本 満年
勉強の子へ軽音楽がはやしたて
落選という名で少し名士なり
じろくど見られてバスに一人立ち
自宅からの電話は不意の金が要り
結いたての髪扇風機容捨せず
投資で見たその靴下の贈りもの
絵の如く尻行く若葉千切りつゝ

熊本縣 西口 如川
何時逢えてなど、初恋もう強く
上首尾と思つた見合それつきり
酔つてない方は勘定拂はされ

岡山縣 福島 鉄兒
割引をされて聞いているとは知らず
夏服の何処か行くところないかいな

酔うて居る証抱靴を置いて去に

岡山縣 直原 湖月
結婚前に聞きたかつたにその言葉
同じ柄ハズ間違へた夜店の灯

岡山縣 藤本 茶々
デパートの夫下僕のように行き
釘一本足らぬようなでい、養子
おつばいが少しすれれるワンピース
赤い靴「行かんよ」夫そつけなし

大阪府 福本 嗣骨
失敗を若さのせいにしてしまひ
夕涼み花火は音もせずあがり

兵庫縣 榎南 夏六
薄給がサンマータムもてあまし
尼さんのオツム泌みく春の色
物騒なことも通つて夕涼み

大阪府 伊藤 迷宮
町内にまだボスが居た夏祭
片思いだつた避暑地の雲を見る
積乱雲ビルビルを威嚇する

兵庫縣 小島 無聖
旧家ですといふ格恰で松が延び
責任はない議論ゆえ派手なこと
蚊帳吊つて妻の歳をばふと思ひ
優越と悲哀でのぼる電線夫

鳥取縣 田中 遊星
戦後派はずばりと恋もうちあけて
恋愛と別な四十の夫婦愛

大阪府 西 いわを
お白粉の香いも露路の奥でする

岡山縣 杉山 一貫
揉め事の部屋とはしらず派手にあけ
人前にはらむだけなり子の躰け

岡山縣 家本 富至
女房に叱られ出したも落日なり
女房は少しめかして轉宅し
笑おうが泣こうが君は百姓さ

岡山縣 横部 牛歩
あの人の写真アルバムには貼らず
母だけで育ち勇気が缺けており
戦傷の馬に蹴られたとは云わず

岡山縣 服部 十九平
氣味悪い今日の社長の碎けよう
建てつけの悪い戸のよな男なり
ストの朝課長机を拭いてゐる

岡山縣 大森 娛句洛
一匹になつた金魚は見つめられ

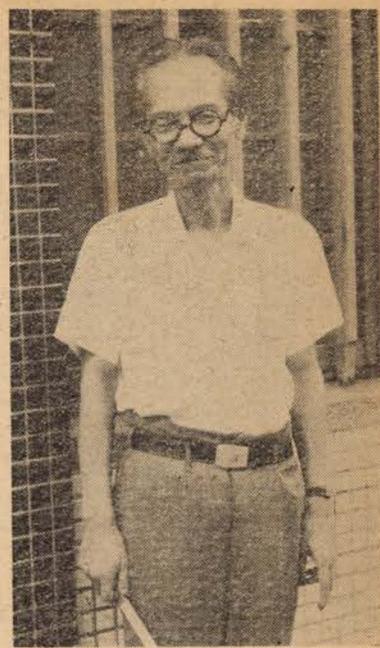
金沢市 安川 久留美
ぬくいから開けたが君は風邪をひき
「脳」の字を忘れているも物思い

松山市 前田 伍健
栄枯盛衰農家ピアノを持ってあまし
招待へ常着で行けるのも歳か
口癖をうつかり真似て座が白らみ
食べられるだけと答へた儲け高

大阪市 橋本 緑雨
信心のないお神樂のおかしすぎ
申カツへ女の足も混つて居

清水市 富士野 鞍馬
老らくというには早い浮気性
常識は貧困にして金があり

上田市 金子 吞風
鉄骨の高さ小さな田が支え
キャンデーの数母親が叱られる



句碑建設の事ども

上田 翠 光

私は大阪で事業会社を営んで居りましたが、再度の應召で到底生還はむづかしいと思いましたが、事業から離れて出征したのでした。後事を托したと思つた弟が戦死しましたので、終戦後私は郷里の山村へ帰還し、家業の農業に従事することになったのであります。

しかし、一介の百姓で終りたくなかと思つたので、村の文化開発についても微力を捧げるし、新しい事業についても案を練つていました。そして事変頃に、麻生先生に師事して川柳を學んでいました関係上、度この僻地の地に麻生先生をお招きして、川柳以外のことまでいゝ／＼と指導をしていただくことにしてまいりました。

先生は熱心、先生の方には誰れもが魅せられずにはいないでせう。曾て、私は先生のためこの地に庵を建造することを提案しましたが、庵など云々もは、聞いただけでも隣近の響を持つて、同じ作るなら積極的なものにして大衆に役立つものにしたまへと一蹴されてしまいました。しかし、私のあたまの中には思案のために、何かを遺そう、と考えて居りました。今度、句碑を建設したと思つて、そのあらゆる一つだと思つています。今春、同村の不朽洞會員、飯降白香女史に謀り、その句が彫上りましたので、先生御夫妻をお迎えして、文字の彫り方、修正するところが、ないか見ていただきましたが、なか／＼巧く彫れてるとのお言葉に、欣喜

麻生路郎師

句碑建設記念川柳会

於奈良縣三木松 翠 光 居

文と画種 瓜 平

恩師の名句を、不滅に記念すべく、熱烈な意欲が盛り上つて、句碑建設のトップを切つたのが、不朽洞有志による生々庵氏の病院の庭、第二は三木の翠光居附近第三は岡山縣弓削駅前と矢継早に建立されていく……以下は、海拔一千七〇〇尺の都座を遠く離れた寒冷線上の第二句碑建設記念会の漫画ルポタージュである。

アゴを出した大名行列

午後八時開会とゆうに近鉄上六駅發四時三十五分とある。乗つてみると、電車も永いには違ひなかつたが、室口大野とゆう駅で降りて、ゴツゴツ歩きはじめた。九十九折れの登り坂を相当歩いたつもりが、道標に「三分の一です」とあるもので、もう誰かが悲鳴をあげている。中程と思われ、一足先を歩いてきた文蝶氏が木蔭の清水を肥柄杓みないのに一杯つつ汲んで、後続の一人一人へ突き出したのサービスに、一同ほつと一息。生々庵氏等手に手にこもり傘をかざして登つてくるさまは、大名行列のようだ。

二丁置きぐらゐに立てられた道標は、竹を割つて紙が挟んであるので直訴みだだ。これには「坂一号」とか、あの寺を目指して一息」とか、うまいことを書いてあるが、なかなか到着しない。兼題の「坂」を実地に味わそうとゆう意途だが、足より口の達者な川柳家達は、いよいよ足に反して、口喧ましくなつてきた。

翠光もえらいところに住んでいるな。やつぱりスネとんのやろ。平家の落武者の子孫や。腹の中では案外、こんな人びりたところだ。悠々暮らせばならぬ。ぐらゐに思つているのかも知れない。ごうにか、白布で覆うた句碑の前を過ぎ、農家然とした翠光居に辿りついたので、夕日に山並が黒すんでみえる頃だつた。見晴のいい縁側に、麻生先生御夫妻や先着の面々が休憩をしておられる。

動き出したカンビヨウ

庭前に丸々としたカンビヨウが、ごろごろなつていたが、ニコニコ動いて来たカンビヨウが一、布袋腹を突き出した方正氏であつた。臍が出ていたであらう。一番ホヤキ屋は里十九氏で、しんがりから一人で喚きながら登つてくる。もう、あかん、アゴを出して下駄はかした。今日に限らず、大伴この人の顔は平常からアゴを前へ引張り出している。ほほ勢揃いしたので、宵開迫る中を句碑の前に集り、翠光氏と建設に協力された紅一点の、川柳家飯降白香さんと、もう一人上田家の親戚の娘さんの手で嚴かに除幕された。記念撮影のフラッシュが稲妻のように草木をおびやかす。もう一枚とゆうところへ下手の方から、おーい、待てえ、と呼ばわりながら登つてきたのは、大鼓腹を波打たせた亞鈍氏の組と豆秋氏。通れてアユミののろい鮎美氏。これで総勢は、路郎師夫妻をはじめ、竹莊、古方、方正、鏡々、梅里、貴山、愛論、史葉、苜蓿、栗、文蝶、没食子、生々庵、里十九、小松園、恒明、亞鈍、晴峯、野介、豆秋、鬮骨、正司、鮎美、瓜平、遠來のお客人では鳥取の日満子、八歩、廣島縣の柳慶、岡山縣の十九平、丹波篠山の無鬼、無聖、薺花、新聞人として海の彼方のハワイから来られた北海。大和タイムスの堀井氏。地元の竹青、翠光、白香要と計二十九名。

色の黒いハナムコ

さて、夏渡せしたフランクリン

雀躍いたしましたして、八月三日、再度御夫妻をお迎えして建設に立会つていただきました。私が、句碑を建てました趣旨は、恩師の不滅の名句によつて大衆への文化運動の一步前進を志したの以外ならぬのであります。この意味に於きまして、海拔一千七百尺の高地である斯かる山村で、川柳不朽詞の錫々たる人が一堂に会し、不滅の聖典で

句碑の句に就て

回顧すると、太平洋戦争の苛烈な昭和十九年九月十五日に私一家は上野市の東方一里余、一の宮の妙慶寺へ疎開した。終戦になつてから、私は大阪へ立戻り、蒨妻霞乃は上野市桑町へ移つた。其後連絡上かなり不便を感じたので、上田翠光氏のあつて

んで霞乃は奈良縣宇陀郡三本松村宇中村の頓光寺の離房へ三轉した。昭和廿年十一月十六日のことである。こゝは非常に景色のいいところ、山又山に取囲まれていて、脚元には宇陀川が流れている。



影撮氏光翠田上 碑 句

ある句碑建設記念川柳会を八月十二、十三日の両日にわたつて催していただきましたことは、まことに意義の深いことと、ただただ感激いたしている次第であります。

麻生路郎

古來大和には幾多の句碑が建設されていますが、川柳句碑としては恩師路郎先生の句碑が唯一のものであることを、郷土の誇りといいたしと存じます。

今回、そこへ句碑が建つことになつたので、同じ三本松村ではあるし、眼界は何処までも山の起伏しているところであるから「名も知らぬ」の句を選定した訳である。

のようなタイプの竹青さんの再会、拍手裡に不朽詞会理事西尾葉氏の開会の辞があり、同じ理事上田翠光氏の挨拶、理事長中島生々庵氏の挨拶、次いで理事水谷鮎美氏、洞友代表高鷲亞鈍氏、副理事長武部香林氏(代読)の祝辞、最後に麻生路郎師の感謝の言葉。目出度し、目出度しで待望の祝宴に入る。……里余の登り坂が、こたえたのみえ、はやあちこちでコロツの廻らないのが出てくる。進行係里十九さんの名指で各々のお宮自慢、インチキ奇術、鼻自慢などが飛び出す。竹荘さんは腕自慢で今宵の板場を引き受けて、殊勳



甲とゆうところ。翠光さんは袴でしやちこばつて花婿然としていたが、歩かせた手前、食糧運搬にキリキリ舞い。サツマ上布か何か知らんが、顔の色が黒いので黒い緋がよく似合っている。

寺小屋のワンパク

既に見て頭がでんぐり返つて、四苦八苦にカンビョウ頭をひねくり廻している。一人でしゃべり立てているのは小松園さん、旺んにユーモアを飛ばして笑わせていたが、勉強のジヤマになるので寺小屋先生にたしなめられる。頼つたに○でもかかれて膝下に立たされるところだつた。

一人で酒豪ぶりを發揮して、酒を呼んでいた亞鈍さんも太鼓腹に隅なく廻つたとみえて、神経戦と称して、皆んなを悩ます。てんやわんやの賑わいのうちに、白香女史の柳話に次いで、各題の選句が披露されて終全と

ときまさに午前二時！

師の句碑へ坂の疲ればもう忘れ(日満子)

それから

司会者曰く、皆さん御苦勞さんでした。では、寝るなと起きているなと濡るなと御自由に、亞鈍氏曰く、濡るからハイヤーを頼む。誰かの声、山の下まで降り自動車屋へ電話をかけて下さい。そのうちに健康兒童は夢路を通つ

て火の字で寝込んでしまつた。愛論氏は隣の餅が邪魔で眠れないとぼして、餅の主は亞鈍氏、これは面白小僧だ。

また遊び足らんとみえる不良兒童は、庭先へ出て山の端へ落ちる流星を勘定したり、乙女座がどうの、ストリッツアー座がどうの、星に向つてふざけ散らして、山の上じまをかき散らして、山の上のたらの山の神の怒りにふれるところ。東がほのぼの白んでも、この連中は未だぼしやいでいる。(誰誰でしたかな)

15日から新発売の.....
便利な全線定期

大阪市内全線用	400円
大阪市外全線用	500円
大阪府内全線用	600円
区間制内全線用	350円

21枚綴 (区間制内各線各区に有効)

(1区)	100円	(2区)	200円	(3区)	300円
(4区)	400円	(5区)	500円		

南海電車

大阪市内全線用 400円
 大阪市外全線用 500円
 大阪府内全線用 600円
 区間制内全線用 350円

共通回数券
 区内間制内

詳細は各駅案内
 電話 2930-9



近作 柳樽

東京に居たが自慢の写真技師 岡山縣苑 女
 松葉杖上手になつた子やあわれ
 おいくつにならぬまの婦長さん
 たんばうでライスカリーが出来た子
 お弁当残して母をあわてさせ
 父まで知れた相手にふられけり
 細く長く暮らす子のない老夫婦 廣島縣芳 泉
 女房で持てゝゐるとは失敬な
 それとなく女居すまいから崩し
 どう世話になつた女か焼香し
 密会のスリルを女忘れ兼ね
 今切れちや損を女は知つて居り
 暮らしの苦知つて二人にひも入り 東京都東 夢
 母に似た年増藝者に失恋し
 今度こそ僕が拂うと云つただけ
 貧乏の中に十九の花も咲き
 たゞ三日暮らしたゞけの未亡人
 結婚が就職だつた世もありぬ 大阪市葉 光
 我儘で親孝行を心得えて
 運命のかわるキツスをせす別れ
 小遣もまゝにならぬに恋をして
 幸福にしたい人あり宝クジ
 さよならを言つたがその手ははなさない 吳 史 球
 モンペイの継が気に入らぬ
 この家の八分位ひは妻の腕
 貞操の安く下つて靴一つ
 心とは逆に軽々チンドン屋

尻ばかり動かすダンス見て歸り 金沢市陽 々
 死ぬる程好きな相手に見縊られ
 成績簿片手盃離さない
 ひとゝきの相合傘を忘れかね
 紹介をされて愛人とも云へず
 無情にも男でバスは出てしまひ 兵庫縣紅 山
 敏出来た服を笑うてバス降りる
 冷蔵庫炎天の道へ賣れて行く
 待つ人のうちわが白い背の橋
 微笑して踊れど家に乳乞ふ子
 百万円の負債さておきいゝ生活 大阪市若 菜
 青春と云ふがギターを抱き歩き
 ろつそうと植えて知らない人住めり
 変な靴いちばん高いとぎに買ひ
 身だしなみとして受取れぬ紅の濃さ 高知市一徹郎
 前身を語るに落ちる二号さん
 懇談会実は女とお酒なり
 最高幹部何んとか云つて酒にする
 三十にならぬ社長も頼りなく 和歌山宏 方
 子の出来茶椀を買つた過去
 三十になつても処女のふしあはせ
 唇がまだ濡れていた月明り
 香典も可なりの負担だぞ出かけ 八代市斗四翁
 子の酌で飲む程のよい子に育ち
 母の忌が二十五年と夢のよう
 妻は妻だけの立場で寝寝もし
 六甲へビツケル持つてガム噛んで 大阪市春 雄
 答辞みなレディメイドの美辞麗句
 流産をしたを近所に羨まれ
 相合傘雨はどつくに止んでゐる
 唯あくびするにも肺へ氣兼ねして 大阪市小 柳
 ぢつと見れば鼠だつて可愛い目をして
 親不孝此処にも一人病んでおり



古川柳と歌舞伎を彩る女

水谷竹莊

僕は川柳と芝居が好きなんです。戦後、高速度に変わつてゆくてんやわんやの社会状況——街上の雑音と生活の不安で、いらだたしい其の日その日え、人生に落ちつきと、樂みをあててくれるものは、川柳と芝居だと思つてゐるのです。芝居の中でも、名優と脚光と、花道と背景、義理人情の世界、歌舞伎のおもかげ程なつかしいものはありません。又その歌舞伎を詠んだ古川柳の味は忘れられない面白味と、その句から艶艶と歌舞伎が描れます。だがその歌舞伎を、古川柳を、語る事は、あまりにも、数も多いし、長くもなりませんので、その中から、最も好きな女を中心にした歌舞伎を、書いて見ました。僕は劇通ではありません。従つて間違つたところもあろうと思ひますが、ともかく女形の様に、氣恥しがりながら暮をおけます。

仙臺秋の政岡
 食うも忠食はぬも忠の一つなり
 忠孝の両手でつかむ菓子の皿
 子雀をれらふ鼠のおそろしさ
 むつの子を既に鼠が喰ふところ
 金鉄の侍縁の下に居る
 寛文年中、伊達亀千代丸の執權、伊達宗勝と家老原田甲斐宗輔等が伊達家を押領せんとして亀千代丸を失はんと計つた。

然るに家老の伊達安藤宗重早くもその悪計を知り妹浅岡をして亀千代丸の侍母たらしめた浅岡は性忠直、外婉心剛であつた。近侍の士松前重光と力を併せて亀千代丸を輔佐して宗勝等の悪計を防いだ。之によつて宗勝等の悪計は意を得ず、終に幕府の沙汰となり、宗勝は流され、甲斐は死刑に、其他の者は罪に処せられ、事安靜に治まつた。伊達家を累卵の危ふきから、再び磐石の安きにしたのは実に安藤、浅岡兄妹の功であつた。これが歌舞伎で有名な仙臺秋である。そして政岡はこの浅岡の事である。

古川柳に詠まれてゐる始めの二句は政岡の一子千松を現はし、子雀にむつの子は鶴千代君、(伊達亀千代丸)の事で鼠は、仁木彈正(原田甲斐)の事である。
 鉄扇で先づ蜘蛛の巣をはらひのけ
 忠臣は縁と橋との下に棲み
 一つつな男鼠をぶちころし
 鉄石のちゆうへ鼠の齒は立たず
 いたづらな鼠鉄扇までくらひ
 鉄之助子のちゆうう刻に油断せず
 以上の句は松前重光(歌舞伎では松前鉄之助又は荒獅子男之助と云ふ替名に成つてゐる。)と仁木を讀んでゐる句である。
 獅子が鼠を取つたのは縁の下
 市川流でぶち殺す大鼠

捨鉢になつたも肺と知つてから 同
 學歷を言はずシヤベルの職に生き 廣島縣季 贊
 恋の仲間扇の動きちと違ひ 同
 ついでとは知らず見舞の喜こばれ 同
 踊り子のドチツたらしい笑いなり 同
 稅務署へ親父切ない嘘も言ひ 熊本市安 彦
 だしぬけに映画へ誘ふ年となり 同
 いゝ年が旅さきでみるストリップ 同
 娘三才姿見へ立つ恐ろしさ 同
 誘惑に負けぬミシンをふみつゞけ 石川縣光 郎
 子の手紙又無心かどとり上げず 同
 飲み仲間誰かゞ口実見つけがし 同
 当選を度外視主義に生きるとか 倉敷市千代男
 八当五落さて馬鹿らしい合言葉 同
 招かざる人出入して氣が疲れ 同
 日本の土産話は掏摸に遇い 東京都万 年
 橋の子の魚籠アベツクに覗かれる 同
 初夏の風部屋にあるもの皆うごき 同
 珍客に疊の針を拾はれる 尼崎市ちか子
 附録だけ隣の娘借りに来る 同
 ミシンさへあればときさず又思ひ 同
 我れながら父に似て居る頬冠 愛媛縣孤 峰
 流れ雲見て答案を書かない子 同
 根はどこにあるか糸瓜の家二軒 同
 十万かといと無造作に会計課 高知市桂 夢
 氣どつてる看護婦女医に見え氣か 同
 ちの手術看護婦さんがきれい過ぎ 同
 整理ある噂灯ともる社長室 大阪市大 門
 梯子酒の本性出してレール越え 同
 役人をやめても肩の右上り 同
 又借りる氣でも一應きりをつけ 吳 市梅 香
 心中を思ひ止まつて強くなり 同
 うらやませがらせて嫁つた人なのに 同

抽斗に鍵のかゝつた十八九布施市柏 葉
 御喋が過ぎてあわてた台所 同
 千円札財布の底にへばりつき 同
 註文をとり損つた無性罷 今治市文 庫
 落ちたかと思へば燕さに非ず 同
 デツキから轉落に似た追放者 同
 絹茨は見送り豆を太らせる 出雲市へこち
 一と冬のエネルギーなり妻を刈る 同
 共同の苗代みづ番買うて出る 同
 恋ふ人の爲には親にうそも云ひ 吳 市史 浪
 一刻の逢瀬に風呂の名をかりる 同
 失業は恋も清算してくれたい 同
 てれくさいから愛情は殺しとき 愛媛縣旭 童
 遅かつた夕食が元皆無口 同
 父親のなご権力をすて切れず 同
 金魚屋の文句子供は知つてゐる 吳 市しずを
 母ちやんも藤村だけは知つてゐる 同
 学校はあれだこれだと金の事 同
 二次会へ出たことまでは言わず寝る 愛媛縣曉 明
 手術台どれも治るといふひとみ 同
 一二はいのめる女であつて欲し 同
 れんげ草二人で摘んだ頃思ふ 熊本縣鶴 堂
 絵具箱開けば子供寄つてくる 同
 久々に逢へばお嫁にゆくといい 同
 花の色にもあこがれる女学生 守口市万 平
 肉体にも自信を持つてふてくれ 同
 一味には巡查もゐるに驚かず 同
 何もかも忘れんとして窓をあけ 滋賀縣文 子
 度外視をされて世の中ひろく生き 同
 スタイルを無視したデザイン 同
 恋人があるんじやなしサンダル買わんこ 大阪市一 昌
 恋人の胸にひつたり満員車 同
 市場かこそ昔こいさんだつた人になり 同

市川流の荒事で「おのれも只の鼠
 ちやあんめへ此の男之助が鉄扇を
 喰はぬうち、カツ／＼消えて無く
 なれえ」成田屋と大向ふから声が
 かゝる仙台萩御殿床下の場面が
 よく現われてゐる。

鏡山舊錦繪の召使お初

二大家の忠竹に乳母梅に下女
 竹に乳母は仙台萩の政岡、梅に下
 女は鏡山のお初を詠んだ句である
 この歌舞伎は加賀騒動の実談か
 ら「尾上岩藤」の草履打ちの一件
 が取り入れられたもので、この狂
 言がよく上演されるのは女に好か
 れるからで、昔の良家の娘さん達
 は結婚へゴールインする爲に「御
 殿」勤めをしたもので、そうして
 この女性たちが休暇の時に何によ
 りも芝居を見つる事
 が樂しみである事
 こうした女性の身
 近な生活描写であ
 ったのでこの芝居
 がよく喜ばれた
 ものらしい。

殿女の喜こびしものにて春狂言に
 よく上演されて大入を取つたもの
 である。
 女中達あらまよいかな草履でさ
 草履打いざ立寄つて見に行かん
 この句は奥殿草履打の場面を詠ん
 だ句と思ふ。劍沢彈正かか詮議の
 役を乞ひ受けた岩藤は尾上を責め
 るがもとより潔白な尾上が知るは
 ずはない。尾上が罪を岩藤に塗り
 つけるために箱の中に岩藤の草履
 を入れて置いたのであるうと詰問
 する。証拠となるべき草履がえ
 つて身の災となり、言ひ開くすべ
 もなく尾上ははた泣くばかりであ
 った。かくて岩藤は尾上を言訳が
 なければ盗賊だと草履を以て散々
 に尾上を打擲する。
 念力で岩も透した鏡山
 下女忠義お殿で邪魔な藤を切り

御守殿の入りが
 日にます鏡山
 まずは増と十寸と
 の秀句御守殿は家
 将軍の姫君の降
 嫁を仰いだ前田家
 にて下谷茅町附近
 まで屋敷を廣げ近
 造營した新御殿の
 ことで、こゝでは
 加賀を臭はして只
 御殿女中を汎称し
 た迄の事であら
 う。実際に鏡山と
 云ふ狂言は非常に



酔いのめ
 ヤコフ

大阪府阿倍野区晴明通一丁目
 特殊紙器工業株式會社
 フタバカツブ株式會社
 電話 天下茶屋 二八〇二番
 二八〇三番 二三九一番

酒販用紙コップ
 アイスクリーム用紙コップ
 其他食堂用紙製品一切

戦後派の唄を手貼の端に書き 小松市茶 佛
 空の青水に映して未だ釣れず 同
 いささかの奢りに夫婦もめてゐる 同
 手袋へはるかな想ひよせて編み 岡山縣吉備平
 臍を出しねじ鉢巻のチョイナ節 同
 會計は私費で飲んで疑はれ 同
 星條旗の影へかすんだ港の灯 横濱市智 水
 夢さめて夢にさまよふ日がかなし 同
 借金がない太陽は俺のもの 同
 後悔はしないと娘の行状記 大阪市志 津
 御自分ともかく縁者はいゝそう 同
 あくびする妻に現実教へられ 同
 捨てられた妓に逃げた過去があり 貝塚市千 舟
 鼻紙に党の機関紙引裂かれ 同
 面会の妻がふくれて去に仕度 同
 ネオンの点滅矢張り俺は都会の子 大阪市弧 舟
 貴方は古いと妻は子供の肩を持ち 同
 まごころナンテファンと女は立ち上り 同
 氣が弱おうなられましたと声落し 米子市鱒 三
 あまりにも大まか過ぎて罪を着る 同
 お隣りの奥さん又も泣きに來た 同
 ハイヒールが病床の下に待つてゐる 貝塚市一 郎
 結婚は墓場墓場に寝むりたし 同
 塩まいたとこへ税吏の忘れもの 同
 半ズボンがいつそみじめな俄か雨 愛媛縣曉 童
 鯉はねて井戸のそうめん思ひ出し 同
 貝殻の死してなほ身をかざるかに 同
 あけすけな話へ女たじろがす 大牟田風 浪
 数億の選挙費俺はめぐまれます 同
 小細胞いともたやすく廻れ右 富山縣三 峯
 僻むから怒り怒るから僻み 同
 あの人の子供と知つて抱いてみる 三原市正 一
 十燭の我が影へ妻ひそとゐる 同

ピッチャーをさせると社長若返り 大阪府きはち
 麗人が僕の新聞盗み見る 同
 ライバルが手を引いたのが不安なり 高知縣十四郎
 花などはいらぬコップですむ生活 同
 先客の食ひ残したはトマトだけ 愛知縣吐 平
 義足立たして落した財布あきとめ 同
 傳言板久しく待つたことにして 大阪市葦文字
 身の上を語りたくない乳がはり 同
 ほんとうは貞女に好きな人があり 鳴門市五厘棒
 女湯が嬉しくなつた夏すだれ 同
 一升壺醬油と知らずお世辞言ひ 兵庫縣波 流
 借金の断り上手になり過ぎて 同
 うき事を重ねて命なれば過ぎ 岡山縣千富彌
 絹糸のよくひつ掛かる手を見つめ 同
 選挙 雜報
 子供もう運動員の口を眞似 兵庫縣一 弘
 鐘ほしい無能候補の放送よ 同
 新聞がきて薬仕事息をいれ 愛媛縣敏 明
 どちらからさらひだしたか面白し 同
 平凡な暮し振子に似て飽きる 廣島縣愛 鳩
 終戦からこつち閣屋でまだ通し 同
 潮干狩波に追われた子が帰り 岡山縣博 柳
 青春を家に棒げてふける姉 同
 予告篇やつぱりキツスして見せる 大阪府晋 水
 あの話になつて乗出す無精髭 同
 ブライドに懸けてと巡査必死なり 鳥取市宵待草
 酒飲めば話のわかる父なりき 同
 有権者各位がチョッピリ室の隅 大阪府草 右
 立会の演説聴いてまた迷い 同
 いそぐとむつきも洗う父となり 和歌山桑 南
 漫画にもなれず大臣更迭し 同
 アロハシャツ知性とぼしき人 滋賀縣斗 志
 好きでないから気軽に話し合ひ 同

添削會

會員募集

▼添削・批評を希望せられる方は左記小規により至急申込まれたい。

- ☆入会希望者は住所、氏名、雅号、職業、生年月日記入の上申込む事
- ☆作品は、一人一回五句(会費同封)
- ☆会費一回 百円(二回郵便切手代用可)
- ☆添削原稿返送用の封筒に宛名を記載し切手を添付しておく事
- ☆講師指名のこと(指名のない場合は皆方で適当に処理)
- ☆講師 藤生霞乃先生 福山山雨楼先生 須崎豆秋先生 水谷鮎美先生 申込所 川柳雜誌社内

川柳雜誌社

鏡山下女は曇らぬ忠義なり
 鏡山下女が挙げれば天下一
 悪事の打合せを人知れず奥座です
 ました岩藤の前へ手をついたのは
 お初であつた。
 主人の病氣を癒すため朝日の登
 像を拜借したいと云ふお初は飯病
 の頭痛に白ばくれる岩藤 お初は
 すかさず頭痛の妙薬として草履を岩
 藤の頭にのせる。やがて傘の中に
 かくした禰陀尊像を見付けたお初
 は、主人の敵と岩藤を打ち果し、
 自分も自害しようとするが、始終
 を見届けた庵崎求女に止められ
 その忠節が殿へ聞えて二代目の尾
 上に取立てられる。

東文章の清水寺清玄
と櫻姫
 お寺参りにこりはくる櫻姫

清玄はふけをかきく日説いて
 櫻姫先づいがり気がに入らず
 ようもない花見に出たと櫻姫
 清玄は離しなさいですすめ也
 櫻姫いがり見ても飛上り
 大黒にやいやじや〜と櫻姫
 「破れ衣に破れ傘、これも誰故、
 櫻姫」と唄の文句にまでなつてゐ
 る清玄と櫻姫の芝居も、よく上演
 される。中村吉右衛門の清玄、時
 藏の櫻姫は当り薬の一つである。
 櫻姫に振られた清玄といふと、
 軒も傾いた草深い庵室に、四百四
 病の外の病ひに瘦せこけて、髪も
 髯も伸びるにまかせた物凄いの形相
 の坊主の様に思はれるが、始めか
 らそんな情けない恰好はしてゐな

秋春筆雜



特効薬

福田山雨樓

投句が途切れる原因について考
えて見た。そして中絶は一種の病的現象であるから治療投薬の方法も按じて見た。先ず原因であるがこれには心理的病因と生理的病因の二つがある。心理的の方は(1)切目を忘れる、(2)間際になつて苦吟するが自信が得られない(3)心配事などがあつて作句の気分が出ない、(4)作句意力が減退して句を作らうとしない、(5)川柳が嫌になり興味と愛着がなくなる。などがあげられ、生理的の方では、(1)多忙で作句のひまがない、(2)疾病、災害、失敗等により失意の場合、(3)慢然と作句に怠慢である、(4)作句の意志はあるが不如意で柳誌購読ができない、(5)川柳観や作句に行詰りを生じた場合、などが考えられる。またこの外に個人的にはいろいろの要因があつて、投句の知覚神経がマヒする場合もあるであろう。従つてこれらの諸病状に対しては、先ずその環境改善から打開してかかれればならぬ場合もあり、対応療法はあまり多いであらう。

しかし自分は今迄短的に特効薬を調査し、多くの症候に万刃なく奏效する秘法を公開して、投句中断患者の速效的治癒に資したいと思ふ。

「川柳家の生命は句の外にはない。詩かぬ種は生えぬ如く投句しなければ發表はあり得ない。大相撲の星取表に休場はややと書入れられるが、川柳家の休場は給金に關係しない。最初自分の投句が活字になつた頃のたのしみを思い出せば間違いない。句の發表は自己の表現であり千万人に語ることでは川柳家のプライドに外ならない。」

ないない盡しのような文句であるが、どんな患者でもこのじゆ文を一日一回でよいから口の中で唄えてもらうことである。ビタミン一本を注射するほどの時間すらからない。しかも効果はてき面である。だまされたと思つて服用して見て下さい。

日月いまだ

安川久留美

近頃の「俳壇」を見ると、之れが俳句かと思ふ所謂川柳に近い七字の羅列に驚く。その一例を上げると

苗運ぶだけが能なる大男

(福井新聞 柏翠選)

など、古川柳「大男総身に智恵が廻りかれ」の皮肉に「苗」という自然の風物の一字を添えた着想を憶面もなく俳壇に載せた句に過ぎない。俳人も右のやうな句に思い切つた(革進?)の新傾向とするならば「一層」や、かな、けり」のハカマを脱いでしまつたらどうか、尤も川柳の方でも亡き高木角亦坊氏など「草詩」という名称で俳句に近い句を發表していたから、俳人側のいい分にすれば、「どちらの方が接近して来たのか?」と水かけ論をふりまくだらう。この双方の「けじめ」は俳人柳人共に鳩首研究すべき問題としてよい。

十七才の時初めて北海道に行き、父が医を開業していた磯谷という漁村(函館から約四〇里)で五月一日から記けていた当用日記——之れが私の日記というものの割めであつた。

その頃から「川柳」こそ作らなかつたが、何か一句を一日々々に書き添えたもので、
鶏の捨てつゝ秋淋し
縁先に猫の晝寝や秋暑し
の作品にその年の九月から十月の記憶を連る。之れが俳句だとすれば「川柳」というものが青年期に入る私の頭にはむづかしい文藝だつたにちがいない。

昔鬼灯のことを「鬼火」と心得て、「むさし野に……鬼火かな」と詠んだ俳人がいたさうな、川柳で「梯子酒」を課したら「梯

子酒のぼりつめたが月おぼろ」という感ちだいの句を吐いた川柳初心者がいたのと好一対。

大正七年に「出稼ぎは百四札を夢に見る」と作つたのも、古川柳に「百四をほごげば人をしざらせ」の作があるのも、時代がハッキリして始めて句の價値をうなづかしめる。昭和の現代では「千四を夢に儲ける懐る手」といふ誰かの旧作でさえもカビ臭い。汁粉一杯の女客が、百四札を出す時代では正に百四円を夢に見る……がふさわしい。句はいつの時代に詠んでも解釈出来るものを最も佳とする。時事吟と課題吟には百年の後、川柳初心入門者が辞書をひもごいて時代を顧る手数が要らう。

「神代より日月いまだ地に落ちず」の古句なら、昭和生れの人でも判る十七字であらう。(七月十五日)

随筆味外二篇

前田 伍 健

味

昭和二十四年七月に亡くなつた下村登山画伯の一週忌が故郷松山市の親戚の家で開かれ、ホト、キヌ誌の産みの親柳原極堂翁(八十四才)始め私も招待されて行つたその席で、子規居士を囲むいろいろの人の話から(登山もその一人)中村不折画翁が爲山の対立談に及び柳原極堂翁が古い手紙を五、六通出して読上げた。その文中に不折を爲山がヒドイ目にコキ下ろして居るので席上の人々もはらはらし、親戚の方も一寸困つた顔に成

山之内製薬
血圧降下に
アーグレミン 錠剤 注射
血管アウトホルモンとアミン塩類
山之内製薬

つたので、史談会の幹事が極堂翁に「先生もうよろしいぞな、次の話に移りませうや」と再三注意したが極堂翁はカナツンポとて「いやまだあるぞな、この次の手紙は……」と声高々と読上げるに一度は白けた一座が、ドツトふき出して、翁任せにしておくと翁は次々と読んで行く、その中に「自分の絵を世間で使は俳画と云うが、自分の絵は俳画でない、俳画とは素人でも描ける絵で自分の絵は日本画である。強て俳画と云うなら俳味と云つて貰いたい」と云う條があつた。今は昔十数年前九州で川上三太郎氏と川柳と川柳味或は川柳味と川柳の味と云う事でも話した事があり、同氏が私に共鳴された味画と云う、この味の深遠さに私は川柳味と云う事に俄かに活を入れたようにハットした。味味味よく考へそして研究すべきだと



選子柳白水清

鋸 吟 題 課

製材の音の合間に鳥が鳴き
鋸でひく足オガクマが隠したり
棚つって棚え鋸忘れられ
植木屋に鋸はあべこべも引かれ
糸鋸が文字をひいてる看板屋
炭も切る蒔も引きます鋸一丁
鋸を立木にあつけけるにする
この辺へ鋸目をつけて割り当てる
無造作に挽いて大工は鋸を置き
テコボコになつたも鋸のせいと
鋸屑が面白く散る風の中
親譲り此の鋸は放すまい
日溜りの鋸の目立を児が閉み
鋸くつを跡に木樵は目をさらえ
鋸を屋根に忘れた俄か雨
新妻に鋸の縦横あらばこそ
工作へ父ちゃんの大鋸さき
借つた鋸こぼれ道の数人でき
鋸を爪ではじいて値がきまり
切れ味が手に快く響く鋸
目立屋の音へ尖つた日が暮れる
水叩る鋸惜しい屑飛ばし
鋸の先で積木の子が遊び
切れもせぬ鋸を大きな顔で貸し

茶々 四案 醉月 茶佛 不味 卯門 史球 十四郎 桂夢 九坡 智水 曉舟 翠柳 葉光 粗影 七面山 正一 千代男 齋花 十九平 吉備平 美能留 淑郎 孤舟 天

母さんの鋸は坊やが押へつけ
弁慶の背中鋸など具え
前職をすつば抜かれた鋸の味
小細工が上手に出来て鋸をほめ
鋸も上手に使い養子です
鋸の長さに合はす道具箱
鋸は御す大社御造営へとう
錆びたまゝ鋸くきにぶら下り
急ぐ丈鋸へ木の目が拗れて割れ
鋸があつていたづらしたくなり
鋸が主人の氣嫌知つてゐる
たまさかに使へば鋸の柄がゆる
轉業に鋸だけは残すなり
何をきるかと鋸を貸してくれ
鋸に僕の短氣があらさき
老ぬれば鋸炭を斬る役目
佳・日立した途端鋸借りに来る
佳・お伺ひしますへ鋸の手を休め
佳・鋸のすてつべんから節を噛み
佳・鋸の目立え施主は話しかけ
佳・切れないを承知も一度鋸を借り
佳・釘ひいた鋸を返しに妻をやり
佳・鋸置いてラッキセアン無爲に過ぎ
佳・鋸を借りに行つたら切つて呉れ

一葉 如川 一葉 手贊 奇骨 奇朗 卯之助 敬貢 美秋 藤波 陽々 芦穂 山雨樓 瀧年 紅兒 日濶子 翻骨 奇朗 芳泉 翠柳 葉光

思つた。
河童
河童は實際居るぞな、私がこの
眼で見たのだから間違ひはない
……話してくれただけ元海南
新聞記者で今は老体を松山城の北
に悠々自適しておる平部天胤翁で
ある。翁は大分縣の某中学校出身
で、在校寄宿舎時代に毎夜教習や
炊事場を荒す曲者があるのを、寄
宿生一同と舎監の先生とも協議の
末、不寝番をつける事に成つた。
……或夜……合図があつた、それ
つと教室へ駆けつけると四、五才
の小兒位の一種異様の曲者が机の
上へ飛び上つたり潜つたりで不寝
番に追い廻はされて居る。それッ
と一同が加勢するとその速い事、
蜘蛛の如く、するすると逃げまわ
り、又突にイヤナ生臭い匂いが
する（この臭さは後で判断の結果
カッパの屁だと先生が断を下し
た）油断があつた、一同が室へ入
つた戸を開けてあつたので其所か
ら廊下へ校庭へ……川べりへ……
た。その後も、その川の橋の上で
時々出会つた人があつたが、スル
リと欄干から川へすべり落ちそ
うであつた。……平部翁はこゝで
念を入れるように云つた。漢和辞
典を御覽なさい、河童の項には詳
しく記してあり、九州の溪谷に栖
むと云つてあるでせう、と結んだ。
……さて本當に河童は居るのだろ
うか？ 川柳誌にも「河童」と云
うのがあつたが、それはそれとし
て、文獻によるかと享和辛酉六月朔
日常陸の國水戸浦の漁夫に捕らへ

られた「屁こき河童」があり昭和
十六年七月三十日廣島中央放送局
から「河童物語」島田敬一氏の放
送があり、要領は大正八年頃河童
平三郎謝恩に猿木虎問答であつ
た。この外に小川芋銭画伯の河童
傳説にもいろいろある……本當に
河童は居るのだろうか、芥川童之
助著にもあつたようだ。「有るな
らば有るにしてお……」下五を
適当に願ひます。

例の四國縣放送川柳角力の第
十二回目、香川縣から婦人二名愛
媛縣から同上二名が登場、高松、
松山放送局二元放送で開演する事
になつたその前夜、つまりテスト
の夜の事である。行司役の私は例
によつて出句の總批評、続いてそ
の句の長所、短所指てきの後ち素
人受けのすれば、これを角力手に例
へて申すならば、くだけた言葉
で批評に入り、上五で突々中七
で受け、下五の強い表現で外掛け
……浴せ倒しとやると「待つた行
司さん待つた」の声あり、沢を開
くと婦人に浴せ倒しだの河津掛け
だのは穏やかでないに注意……全
く御尤も千万と今度は鎌刀と小太
刀の試合様式でやると「待つた櫓
太鼓が鳴り土俵上とか川柳角力と
か云うのに八相に
構え小手と見せ
てお面一本などは
聞えぬ」と注意……
……結局……角力の
手の中で、押出
し、突き出し、位
で批評しては如何
と評議一決、翌日
無事この放送も済

告異聞
西尾 葉
え、ことは似ないものでして、
十四年と九ヶ月になつた長男が將
來ナンになるうかと相談して曰ク
「アレにもなりたし、これにも
なりたので実は迷ふてゐます」
自分の若い時分とそっくりで、
結局自分もなりたし、ものだらけ
で、人生を五で割つて五年づゝ異
つた職業をやるうと決心した時代
を思い出して苦笑しましたが、自
分の全然なるうと思はなかつた職
業に、長い劍を吊つたこと、鎌
を握つたことでした。さて長男の
言ふには、漱石の草枕を帯んであ
ると、あの中の家やうな生活
をしてみたいと思ふし、又新聞記
者にもなつてみたいし、かと思ふ
と政治家にもなつてみたいし、大
美業家になつて、極度の文化生活
をやつてみたいし、船乗りにも、
弁護士にも、科学者にも、なりた

胃酸過多
胃痛・胃潰瘍に……
ホルモザン錠
45錠入
大坂・武田藥品工業株式會社

いものだらけで、人生五十年では迎も足りませんといふ。成程其の氣持は解るが、結局僕も迷ひ氣の爲に、遂に物にならず四十の年を激へてしまつたが、然し若い時分の望は捨てず、六十才になれば、金部何もかもおまへにゆづつて、僕のやりたかつた、考古學と川柳を是非やり度いと思ふから、其の費用はよるしく頼む、先づ税金のやうにしてうつつゆく心算だと、今度は自分の二十年先のことを話すと、伴、すかさず「其時はお父さん、青色申告致します」

今更乍ら先生の名句「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」がしみじみ、夏の素肌に沁みました。

趣味と生活

静岡 忠 八

川柳に生き川柳に死ぬ、そんな事が出来るだろうか。経済的裏付けさへあれば出来ない事はない。川柳ばかりでなく、自分の好きな趣味に生き、趣味に死する事は人間最大の幸福の様にも思はれる。

だが、それはたいいていの人には不可能である。生活の不安におびやかされる環境にあつては、趣味どころではない場合がある。單に生きたが爲め、食糧がためのおけくれの勞苦を繰り返して居る事を思ふ時、つくつく人間がいやになる事もある。

だが、貧乏の中にも多忙の中にも、かすかな川柳の趣味と慰安に依つて、心のうるほいを求める事

の出来る人は幸福でもある。すべのものの意義と價値を本質的に考へる時、多くの場合は空虚な感に打たれるのは、私一人であるうか。複雑なる人生、貧しき生活、私は唯一の川柳の趣味さへ遊離する事を余儀なくするのである。

不朽洞

会から

▼佐野ト占氏 (八代市) は病名もつかないうちに癒つて、もう出勤されてい

る由、「目玉だけ大きくなつた病み上り」の句を寄せられた▼木村孤浪氏(東京都) 七月十一日東京を發ち札幌、砂川を経て釧路え、廿四、五日頃に東京に帰えられるとのこと句信に「いつのまにか東北弁に汽車はなり」「久々に見るアカシヤに立ちごまり」▼路郎主幹は七月十八日、泉南郡橋本の長谷川一徹博士を訪問談話された▼村松夢裡氏は大阪市阿倍野区天王寺町二九七九アベノパンション方へ移轉された▼北川泰稟氏は七月に高砂鉄道病院院長(兵庫縣荒井村荒井)に榮轉された▼鈴木九坡氏(岡山縣)は事業の不振から健康を害され句作から遠ざかつていられたが、縣下に移られてから健康を取戻され、作句に精進されている▼淺田右門博士(東京都)は「私も病臥一年半ですが、まだタイクツはいたしません。只今書庫の中にベッドをおき、書架の間にかこまれて手をのばせばスキナ本がとれる様にして、アツチコツチよんでいます。まだ法医学の研究生

の論文を校閲したり、法医關係の隨筆で稿料をかせいだりしています」と▼市場没食子氏(大阪市)は七月七日十九時發で通信藥學會並に東大に於ける日本藥學會に出席のため東上された▼國弘半休門氏(下関市)は東京出張の途上、八月十二日に來社されたが、路郎主幹が大和の句碑建設記念句会のため十一日から出張していたので全えずに辭去された▼丸山弓削平氏(岡山縣)から「いよ／＼句碑を弓削駅前建てることにしました次に西日本川柳大会を弓削小学校で九月十七日(日)の午前十時から開催いたします。ついで同日午後三時に打切り、三時半より弓削駅頭に句碑除幕式を挙行したいと思ひます」云々の通信があつた。当日は大阪から路郎師、生々庵、綠雨、鮎美、豆秋、香林、亞鈍、翠光(奈良縣)の諸氏と梨里が参加することになつてゐる。

▼福田山雨樓氏(横濱市)の健康状態も次第に快方とのこと、切に自愛を祈る▼蛭子省二氏(愛媛縣)は八月一日に一週上人忌を営まれた由。▼伊藤定美さんは家事の都合で七月限で退会された。

新会員紹介

- 長谷川 三 司氏(尼崎市) 正
 - 田 辺 由 布氏(西宮市) 正
 - 荒 木 哲 水氏(大阪府) 正
- 以上鮎美氏推薦

礎書御伺

- 小 川 恒 明
- 大阪市東住吉区田
- 辺東之町七ノ三三

礎 書 御 伺 (柳人交歓のページ)

高 鷲 亞 鈍
大 西 野 介
龜 山 晴 峰

特殊紙器工業株式会社
大阪市阿倍野区晴明通一

南 区 医 師 会

川 柳 同 好 會

木 崎 大 老
長 谷 川 迷 路
南 木 捨 正 舟
黒 田 一 彈
牟 田 瑞 川 哲
河 村 瑞 川 庵
木 村 無 名 林
中 島 生 々 々
田 中 鳥 耕

岡山市下出石町六二ノ一

藤 本 満 年
藤 本 茶 々
前 山 北 海
東京都千代田区神田美
土代町七YMC A ホテル

いのちある句を創れ



投稿清規 確 用紙は原稿用紙 文字を正 開催月日及場所記入 締切毎月廿五日 投稿先本社宛

本社七月例会(大阪)

一日 午後五時三十分 於 大宝文化会館

あつさに正比例して作家の熱は上昇するばかりである。鮎美氏は竹荘氏の「失業の大人を笑ふ靴磨き」梯梧氏の「ごつちにも理があり船は沈みたり」へち氏「くたびれもせず賣出しを繰返し」を採り上げ句評に熱意を傾けられ、路郎主幹の柳話ば俳句と川柳の相違がいまだにハッキリ判つてない態度の作品に就て、句例を挙げての熱弁をふるわれた。七月旬会のベストテンの第一位不朽洞賞杯は須崎豆秋氏が獲得され、重鎮としての賞録を示された。九時散会(幹事)出席者 路郎・鮎美・梅志(文蝶)・愛論・乃布男・紫香・万の・青丹子・生々庵・修三・恒明・春柳・種美・古方・豆秋・三司・春集・季贊・白柳子・淡舟・万樂・正司・緑雨・昌子・花村・春己・夢裡・いわを・鬮骨・亜純・吾介・晴峯・博也・霞乃・梨里

兼題「白靴」 麻生路郎選

花村 打水を白靴踏んでみた 白靴へ天氣予報は狂い勝ち 白靴で貧民窟を視て廻り 潔癖な妻白靴へゆきときき カビ生へたまの白靴で旅に出る 白靴コック 彼女を待つてる妻 キヤバジンへ型のくつれた白靴 遊境の恩師へすまぬ白靴 白靴(クロッシンダ)はOヤード 白靴へ同情をして傘を貸し 白靴へ故郷の泥はついたまゝ 白靴のよこれくつて呑み歩き 白靴にその小胆さチラと見せ 高架下夕立雲を見て話し 夕立になつて追加の酒となり 夕立に告別式は少し延び 夕立へ蛙も何かさきわいて居 夕立へ退け時近いピルの窓 夕立へニンニク臭い人と軒 夕立は生駒へんらし撒水車 夕立は道頓堀の面白さ 夕立ははれて祭のべを着せ 夕立を二階からみてる面白さ 夕立のとばしり金魚鉢に入り 夕立へ終点までは乗る氣で居 夕立の間をうろうろと地下賣場 氣持よい夕立ビールでも抜こか 夕立で夫婦が入る喫茶店 窓にあごのせて夕立の面白し 夕立へ女工それく思ふこと 夕立へごろんと牛の大きな目

兼題「刺身」 高鷲亜鈍選

青丹子 刺身へ磯の香がする宿の膳 折詰の角で刺身わ色を変へ 退院は近し刺身を許される 折詰のさしみぎく語にされ 働いた手は無造作に喰ふ刺身 身ごもれる妻へ刺身の山葵よけ

兼題「信心」 阿万満選

阿万満 信心をちして闇の値を覚えて来 信心が過ぎて四方の義理を欠き 信心も程々ですよと酒を呑み 信心とあなごる母に泣くある夜 朝参り姑嫁にそつと出る 信心を口実にした酒をさげ 関病の子あり本門佛立講 今となつてはじやまな信心止められず 役徳もあり信心をやめられず 山小屋の窓信心の灯がゆれる 詠歌踊りも信心の沙汰でなし 信心のまいる費用の借りが出来 信心ももうつかり出来ぬ金詰り 信心の母の通りに掌をあわせ ベニシリン効いて信心止めにす 信心は鳩へ土産を忘れない 眼鏡はすせば信心の灯の美しき こんな寺にもお百度をまむ石のつや

兼題「土曜日」 富岡淡舟選

富岡淡舟 新制を出て土曜日は落つかず 土曜日に限つて酔ふて帰る父 土曜日は第二夫人を訪れる いわを 土曜日の雨には雨で逢つて居る 日曜をかけた土曜のプランなり 土曜日は父さんおそい晩と知り 土曜の帯を待ってた藤の相手 土曜日は迎いの傘が来て居らず 女事務土曜は別の服で来る 一 盛り場をアラく歩いてる土曜 土曜日の感激深い医者稼業 土曜日の午後藤雀のつれが来て 土曜日に傘を忘れたまゝ帰る

始めから宿る氣土曜をきて呑む 土曜日の晩から行ける國を持ち 子を抱いて連れる土曜の夜店の灯 さそわれるまゝ土曜日の戎橋 土曜の夜預け損れた金を持ち 土曜日に帯着待つてる母があり 誘惑が多い土曜の女事務 酔ふまゝに土曜日といふ腰をきえ 土曜日に朝から妙な客が来る 土曜日に来いと氣輕に言ふてくれ

兼題「かんしやく」 互選

互選 かんしやくを持って生れた様云ひ かんしやくの茶碗が割れてシシする かんしやくは猫に當つて晝寝する かんしやくの電話ながくつたがたえ かんしやくの且那又馴れたらこたえ かんしやくの一人はつちでぼろこかれ かんしやくにかんしやくの冷奴 かんしやくを饗めに女二人立ち

川東京支部句會(東京都)

六月廿五日

於 島野ビル三階 川村好郎報

うそ・アベック・浴衣・夏祭・女中・蟻

純情が藝者のうそをまた信じ うそうそうそよと嫁ぐ日が近い リンタク屋アベックやらに乘せたり もう五分も五分と二人離れない

阪田膽写版

大阪北区芝田二五番

株式 阪田商會

電話 五三六 福島 一五九 番 番 一四番

高志 不二 稻水 好郎

アベックが他のアベックの批評をし
アベックの向いおぼれてる夜汽車
はれたのし知らず相合傘が行き
値下りを待つ浴衣の時機がきき
浴衣から三線客とあしはればれ
貨浴衣女の素性がくさらばれ
生きのびて母の浴衣が派手になり
夏祭地下へもぐつたボスも見え
遠来の叔父もくつるる夏祭
夏祭昔の顔がまだならば
夏祭線香花火へ日が長い
鉛筆で書いた女中のラブレター
昔女中おいてゐました云ふ女中
基準法も知らずに女中まだ動き
洋裁をしてから女中お手がつき
許婚を袖にしたとかあの手の中
ハツケなき知らぬ女中の手相を見
女中への土産は女房眼を通し
女中らしい女中おまごも足らず
蟻のよな生活だよとたゞ笑ひ
末ツギが出て来て蟻を退治する
蟻の恋たゞ胸づくでモノにする
働けど働けど蟻やせてゐる
しかられた子の眼に蟻がまがらふ
川雑布
味支部
五月二十六日 於 商工会館

大に引かれ難物を巧に黒眼鏡
黒眼鏡ダモイの夫口きかず
かくされぬ年なり眼鏡もを云ふ
看護婦の眼鏡にては立派すぎ
色眼鏡兎角世間を狭く生き
老眼鏡求めなさいと妻の言ふ
写真では眼鏡をかけてゐなかつた
日本の新聞眼鏡又眼鏡
その顔は裏面工作出来た顔
肩書の多い名刺にたまされる
借金の事は兎も角触れず居
雑川
出雲支部句會(出雲市)
五月二五日 於 商工会議所
尼緑之助報

來訪の記者は信者になりすまし
意見する氣の鏡輪へ誘はれる
鏡輪のふつと目高の群に似る
金詰りよそにピンゴの拡声機
口癖に酒の注意が氣にくわす
抱堂
岡山支部句會(岡山縣)
六月廿四日 於 岡山鉄道弘濟會
藤本満年報
素直・靴下・海岸・愚かしき対立
通動・名人・鼻
恋捨てゝ素直に物が首へ始め
素直さがまだあると母肩を持ち
診察へ仰せ通りになつてゐる
はいくゝと妻同権を主張せず
末つ子は素直に物が受取れず
特價品だつた靴下を礼に呉れ
靴下を見せまいと靴下を呉れ
靴下を愛へて馳走になる氣で出
靴下をかいて呉れた夜の女
靴下を脱いで女となりけり
片ツボの靴下子供持つて来る
海岸の松ひれくられて
浜つたい恋の名残りのつきる迄
砂浜のパラソル毛がヌツと出る
海岸へ行くバス松を松を抜け
海岸も汽車貨丈で来て暑し
安物が泳ぎのうまい海水浴
トネルを出た眼に海の青と
利己主義の勞資又もヤストに入り
ニールック同志批判の眼で通り
魚ごまへ肉屋負けと惹をそえ
鉄をドラックぬと惹をそえ
注射なご効かぬと按摩ちと力み
ゆする事知らず辞表を書かされる
通動のコースを愛へたよい天氣
開き合わせ通動先に念を押し
通動のいつしかついた猫背ぐせ
名人と言はれる腕で飲み歩き
名人と言はれる借金だけ残し
名人の藝をはなれた好々爺
瀧年

品質優良
タチカワペン先
TACHIKAWA PEN
大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社



タチカワペン
タチカワセム
タチカワ

名人へ記者不躰なことをきき
馬の鼻たいた騎手にある自信
鼻ばかり氣にして化粧長くなり
いゝ娘だが美人を鼻に掛ける
鼻かんでから冷い返事する
風來子
竹原支部句會(廣島縣)
六月三日 於 葉留路居
弘津柳慶報

振子・選挙・組
今日も又振子止つたまゝにあり
のんびりと振子の動く大時計
難問へ振子の音が早すぎる
消えて行く命振子の止まるに似
世直しを頼む一票入れに行き
開いた機名前だなあと全国区
紐解いて引越荷物へ一服し
腰紐を取つてと女房氣が強い
可笑

五月三十日 於 弓削小学校
鮮やか・笑ふ・声キヤンデー・四
ツ角
鮮やかに刑事の方が投げられる
百郎



編輯室にて

▼暑熱と取っ組んでの編輯である
 あたまたま、痛いと云いながら梨
 里が夜遅くまでカン張つてくれ
 た。▼表紙は例によって由比種三
 郎阿伯を頼はした▼本号は中堅作
 家や新進作家の「作家を語る」座
 談会で読みごたえのある誌面をつ
 くることにした。▼誌面は何人え
 も開放しているので、よい原稿を
 よい句稿をドシ〜と寄せていた
 だきたい。(路)

動靜

▼本社八月旬会は五日午後五時半
 から大空文化会館三階で開催され
 た▼路郎句碑建設記念旬会が川柳
 不朽洞会主催の下に八月十二、十
 三日に大和の上田翠光居で開催さ
 れた▼大阪通信病院川柳会では八
 月廿日、箕面吟行、近畿電気通信
 局山の莊で旬会を開いた▼南海
 電鉄川柳会は八月廿二日午後五時
 半から南海高等学校で開催▼南区
 医師会川柳同好会は堺市淡寺諏訪
 の森の生々庵居で開催された。以
 上何れも路郎主幹出席▼川柳対抗
 試合(角一ゴムKK・特殊紙器工
 業KK)が七月廿三日午後一時から
 阿倍玉子神社で開催され、五二
 点対三六点で特殊紙器が勝つた。
 ▼川柳岡山支部では七月十五日満
 年居で納涼旬会を開催した▼川柳
 岡大支部旬会(岡山市)は八月五
 日学内で開催され翌六日には香川

縣鬼ヶ島へ吟行された一行十六名
 ▼長崎川柳社では八月六日山里小
 学校で、原爆追悼川柳大会を開催
 された。▼川柳美作支部婦人旬会
 (岡山縣)が黒田久美子さんを中
 心に七月十九日の第三回を開催
 した▼猫柳例会(小松市)は七月
 廿一日に開催された▼川柳岡山支
 部七月例会兼吉備團子第二集發
 行記念旬会を七月廿二日弘済会食
 堂で開催▼ざざり吟社(金沢
 市)の納涼連夜旬会が八月廿一
 廿二、廿三日午後八時から彦三三
 番丁の公民館で開催▼岡山縣川柳
 人旬集「吉備團子」第二集が七月
 廿日刊行された。希望者は実費五
 〇円送費六円、岡山縣和氣郡吉永
 町福満 浜田久米雄氏へ▼旬集
 「川柳の丸」が鳥取市の川柳日
 ノ丸会から八月一日刊行された
 (非賣品)▼庄方よし氏(大阪市)
 は七月廿四日に初孫秀子さんを儲
 けられ「神わざのチヤンと揃うた
 目鼻立ち」の句を寄せられた▼廣
 江天痴人氏(鳥根縣)は「年末は松
 江市となる村に住み」風はみどり
 ほしい平和はまだ遠く」の句信を
 寄せられた▼山田陽々氏(金沢市)
 は安川久留美氏を病院に訪れられ

最短時間で結ぶ
大阪一名古屋
 時間25分
 3 特急
 毎日3往復
 座席指定制
 特急料金 ¥50
 上本町発 7.40 12.40 16.40
 名古屋発 8.05 13.05 17.05

たが久留美氏は近く退院されると
 のこと▼河橋梵鐘氏(貝塚市)から
 千原庸司氏数日前喀血以來とみに
 容態悪化、茲二三日が憂慮される
 状態、意識のあるはあと二日位
 知らずと淋しい事を云い、先生へ
 おおらせしてほしいと云つて居り
 ましたとの通信に接したので、路
 郎主幹は十八日午後千石莊へ庸司
 氏を見舞つた▼高木東魚氏(北海
 道)が六月二十日余市町の自宅で
 永眠された。氏は千石莊の体温川
 柳会員だった▼延永忠美氏は岡山
 市南方九四へ轉宅された▼大森苑
 女さんは岡山縣和氣郡吉永町福満
 へ移轉▼松原周太郎氏
 は福岡縣八幡市黒崎町
 二丁目池田一美様方へ
 轉居▼村田眉丈氏(福
 井縣)は近時快方に向
 はれボツ▼患者の診
 療を美している由▼西
 川晋美氏(神戸市)は大
 阪の大同ビル都是産
 業輸出課に嘱託とし
 て勤務されている。▼
 久保田多佳史氏(大阪
 市)は八月十一日午前
 十時から大阪商工会議

所て廣告
 夏季大学
 の講師を
 担任され
 た▼米本
 儀祐氏
 (大阪府)
 は貴志子
 夫人を亡
 くされ
 「未亡人
 程に思は
 ず仕事あ
 り」一買

御評判の名物食堂再開……
お好み食堂
 七階
 松坂屋 大阪日本橋

風趣豊かな
 お好み食堂
 御評判の名物食堂再開……
 七階
 松坂屋 大阪日本橋

おでん ○とんかつ
 おおでん ○中華料理
 おおでん ○ビール
 フルーツジュース
 甘栗 甘栗
 茶屋 『甘樂亭』

よい子みな
 近鉄上パーク
 て遊ぼうね!
 飛行機・汽車・ジープ・三輪車
 マリーゴランド・水筒・スク
 ーター・望遠鏡・金魚すくい等
 アベノ近鉄大

Made in Occupied Japan

募 集
 課題吟募集
 (十句) 尾崎方正選
 (九月廿五日締切)
 カメラ (十句) 浪玲之介選
 (十月廿五日締切)

毎号募集
 近作柳樹雜詠廿句 麻生路郎選
 川柳塔(雜詠) 麻生路郎選
 文章(評論・研究・感想其他)
 (廿五日締切)

投稿規定
 ▼投句は各種必ず別紙に認め、住
 所氏名雅号を明記する事。
 ▼「近作柳樹」は一般作家の雅吟
 を募る。
 ▼「課題吟」は何人でも投句が出
 来る。
 ▼「川柳塔」への投句は不朽洞会
 員に限る。

日列5号 毎月一回一日発行
川柳雜誌 第五卷
 第九号
 一册 金三〇円 (送料三円)
 半ケ年概算 金一九八円
 一ケ年概算 金三九六円
 昭和廿五年八月廿五日印刷
 昭和廿五年九月一日発行
 大阪市住吉區代田五丁目二番地
 行印屋 麻生 幸 二 郎
 發行所 **川柳雜誌社**
 大阪市住吉區代田五丁目二番地
 電話 口番 大阪七五〇五〇